

石見銀山遺跡

平成25年度間歩調査概報

平成26（2014）年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

石見銀山遺跡

平成25年度間歩調査概報

平成26(2014)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会



日本海側から見た仙ノ山とその周辺

序

島根県大田市にある石見銀山は、約400年にわたって操業され、特に16世紀から17世紀にかけて多量の銀生産が行われた日本を代表する鉱山遺跡です。

石見銀山については、早くから調査研究、遺産保護の取り組みが行われてきており、平成19（2007）年に鉱山遺跡としてはアジアで初めて世界遺産に登録されました。また平成22（2010）年には、遺産の保護をより確実なものにするため、資産範囲の軽微な変更も行ってきたところです。

島根県と大田市では、引き続き発掘調査や文献調査など石見銀山に関する様々な調査に取り組み、世界遺産登録後においてもその価値を高める努力を重ねて來ております。

本書は、これら調査のうち平成25年度に実施した間歩調査の成果を中心に報告するものです。

この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成26年3月

島根県教育委員会

教育長 今井 康雄

例　　言

1. 本書は、平成25年度に実施した間歩調査の概要についてまとめたものである。正式な報告について
は別の機会に行う予定である。

2. 調査を実施した場所は次のとおりである。

島根県大田市大森町地内

3. 調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査活用委員会

高安 克己（島根大学名誉教授）

井上 雅仁（島根県立三瓶自然館学芸GL）

大橋 泰夫（島根大学法文学部教授）

勝部 昭（元島根県教育委員会教育次長）

黒田 乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）

小林 准士（島根大学法医学部准教授）

田辺 征夫（前奈良文化財研究所所長）

中塩 弘（DOWAホールディングス株式会社取締役）

仲野 義文（石見銀山資料館）

中村 俊郎（中村プレイス株式会社代表取締役社長）

西村 幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授）

林 秀司（島根県立大学教授）

原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）

村上 隆（京都国立博物館学芸部長）

和上 豊子（元石見銀山ガイドの会会長）

事務局（平成25年度）

野口 弘（文化財課長）　　　　　後藤 守弘（同文化財GL）

松本 洋子（文化財課世界遺産室長）　辻原 幸春（同企画員）

田原 淳史（同主任）　　　　　角 俊一（同主任）

鳥谷 芳雄（同主席研究員）　岩橋 孝典（同専門研究員）

矢野健太郎（主任研究員）　小杉紗友美（同嘱託職員）

間歩調査指導者

井澤 英二（九州大学名誉教授）

中西 哲也（九州大学総合博物館准教授）

鳥越 俊行（九州国立博物館）

4. 分布調査については、昭和開発工業株式会社に委託して実施した。また内部調査のうち計測については、独立行政法人国立高等専門学校機構松江工業高等専門学校に委託して実施した。
5. 調査においては指導者のほか、下記の方々から多くのご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表したい。

中村 唯史（三瓶自然館）、仲野 義文（石見銀山資料館）、久間 英樹（松江工業高等専門学校）
6. 調査票、写真、図面等は島根県教育委員会において保管している。
7. 石見銀山遺跡地内の鉱業権は島根県が有しており、また史跡の管理は大田市教育委員会が担っている。間歩には採掘から乍月が経過し崩壊等の危険が高まっているものもあることから、無断で立ち入ることを禁じている。注意していただきたい。
8. 本書の執筆・編集は田原が行った。

本文目次

第1章 石見銀山の概要	1
第1節 石見銀山の概要	1
第2節 石見銀山の歴史	2
第2章 調査の目的・内容	3
第1節 調査の目的	3
第2節 調査の内容	3
第3章 これまでの間歩調査の概要	5
第4章 平成25年度間歩調査の概要	7
第1節 分布調査	7
第2節 内部調査	9
第5章 まとめ	11

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡の位置図、範囲図
第2図 間歩調査 調査票例
第3図 平成23年度から平成25年度の調査範囲
第4図 平成25年度分布調査確認間歩及び468号間歩位置図
第5図 昆布山谷地区露頭掘り跡、位置関係図
第6図 468号間歩平面図 (S = 1/300)

表目次

第1表 過去の間歩調査一覧
第2表 468号間歩支坑道計測値

写真図版目次

図版1 露頭掘り (R55、R60)、664号間歩
図版2 665号間歩、昆布山谷の現況、佐尾壳山神社
図版3 露頭掘り (R57)、716号間歩、鼻縁岩
図版4 468号間歩周辺状況、内部状況、埋戻し状況

第1章 石見銀山遺跡の概要

第1節 石見銀山遺跡の概要

石見銀山遺跡は、島根県のはば中央にある大田市に所在する。鉱山としての石見銀山は、16世紀前半の採掘開始から20世紀前半の休山まで約400年に亘って操業された、日本でも有数の銀鉱山である。特にその初期においては、多量の銀を主に東アジアを中心とした地域に供給し、その経済に大きな影響を与える存在であった。

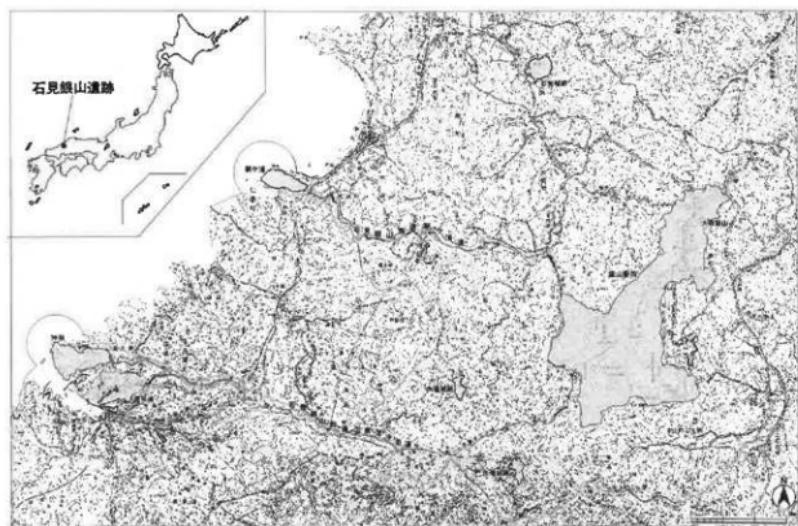
現在鉱業活動は停止されており、鉱業活動そのものを体感することはできないが、銀の採掘から製錬に至る一連の作業が行われた鉱山跡、鉱山に関わる人々の生活の場であった鉱山町、生産された銀を運んだ街道、また銀を積み出した港湾・港町、などが良好な状態で残り往時の

雰囲気を伝えている。

これらの遺構、町並みは国の史跡や重要伝統的建造物群保存地区などに指定・選定され、保護・保存の取り組みが続けられている。

平成19（2007）年には、1) 東西世界の経済的・文化的交流を生み出したこと、2) 伝統的な技術に基づく銀の生産を示す考古学的遺構を良好に残していること、3) 銀の生産から搬出に至る土地利用の在り方を示し、それが現在に受け継がれている文化的景観の事例であること、という点で顕著な普遍的価値が認められ、ユネスコの世界遺産にも登録された。

現在では江戸時代の面影を残す坑道や町並みを中心に多くの来訪者が訪れている。



第1図 石見銀山遺跡の位置図・範囲図

第2節 石見銀山の歴史

石見銀山が開発された年代については、「石見銀山旧記」等の文献資料から1526年のことと考えられている。それ以前の14世紀初頭にも、地表に露出した自然銀を採掘していたことをうかがわせる記述もあり何らかの採掘活動が行われていた可能性もあるが、現時点では明らかでない。

「石見銀山旧記」によれば、石見銀山を発見したのは博多の商人で中国との貿易に深く関わっていた神巣寿徳という人物であり、銅の取引をするために出雲へ赴く途中で銀山の存在を把握、その後銅山に関わりのある人物を伴って現地を確認し開発が進められたとされる。

開発当初は製鍊技術も十分でなかったため鉱石のまま搬山していたようであるが、1533年に朝鮮半島に系譜を持つと考えられる灰吹法を導入し、現地での製鍊が可能となったことで、銀の生産が飛躍的に伸びたようである。

文献資料以外では、そのことを裏付ける考古学的遺構も確認されており遷鉱・製鍊については明らかとなりつつある。但しその前段階の採掘に関しては、その具体的な方法・内容を示す文献資料がほとんどないため、実態については不明な部分が多い。

17世紀初頭に江戸幕府による支配体制が確立すると、石見銀山はその直轄下に置かれることになった。初代の銀山奉行として派遣された大久保長安は、銀山における生産体制に「直山制」などの新たな制度を導入し、その強化を図っていった。しかし江戸時代も前期を過ぎると、採掘場所の深化やそれに伴う湧水等の問題で採掘自体が困難な状況に陥ることも多くなったようで、次第に産銀量は低下していった。採掘に関しては、慶長年間には「よこあい」の記述が見られるようになることから、水平坑道は

この頃に石見銀山に取り入れられていったものと考えられる。また江戸時代には、間歩の開発にあたって一定の基準が定められた。

19世紀半ばの明治時代には民間人による経営が行われることとなった。1886年からは藤田組による経営となり、西洋からの技術が導入された。採掘にも削岩機が使用され、この時期に主要な坑道の拡張も行われている。

しかし1923年には休山となり、石見銀山における生産活動は終焉を迎えることとなった。

<主な参考文献>

- 『石見銀山遺跡総合調査報告書1～6』島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999
『石見銀山史料解題 銀山旧記』島根県教育委員会 2003
『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』
島根県教育委員会・大田市教育委員会 2011

第2章 調査の目的・内容

第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世、さらには近代へと長期にわたって銀を中心とした生産活動が行われた遺跡であり、その生産活動の実態に迫るため、考古学的調査、歴史文献的調査、科学的調査など様々な侧面から調査・研究が進められている。

間歩調査は、石見銀山における採掘活動について、その一端を明らかにするため採掘跡の分布状況を把握すること、またその管理状況について点検し今後の保全に資することを主な目的に、平成23年度から5か年の計画で実施しているものである。

第2節 調査の内容

平成25年度の間歩調査は、石見銀山柵内の板畠谷・昆布山谷を中心とした69haにおける分布調査、及び閑連調査として468号間歩（甘南備坑）の内部調査を実施した。

分布調査は6月から開始し、1/500スケールの地形測量図をもとに現地踏査が行われた。調査では確認された採掘跡についてそれぞれ調査票に記載された。その際には次の基準を用いている。

1) 間歩調査において取り扱う採掘跡

間歩調査においては坑道型採掘跡及び表面型採掘跡の両方を把握する。坑道型採掘跡については、「～間歩」、「～坑」、「～山」など異なる呼称を持つもの、名称の明らかでないもののが存在するが、今回の調査においては、坑道型採掘跡については「間歩」、表面型採掘跡については「露頭掘り」として取り扱う。

2) 採掘跡として間歩、露頭掘りと判断する基準

間歩、露頭掘りとも人為的な採掘跡である。人為的なものかどうか調査時に現地で判断できないものについては、選別のしすぎによる漏れ

を防ぐため間歩・露頭掘りとして取り扱う。なお、当該地域においてよく見られる、岩盤を四角形に削り貫くが奥行きの浅いものについては、石造物等を設置するためのものと判断できるため、「間歩」としては扱わない。また、現地に置いて間歩・露頭掘りと認定しなかったものについても、今後の検討資料とするため写真等の記録はとる。

3) 間歩、露頭掘りの区別

垂直に切り立った岩盤の下部を、すかし掘りのようにして採掘されたものについて、間歩とするか露頭掘りとするかの判断基準は、採掘進行方向の深さに対し間口の方が長い場合は露頭掘り、逆の場合は間歩として判断する。但し、周囲の状況によっては露頭掘りの適用範囲を広げる場合もある。

4) 露頭掘りの数え方

一連の脈に沿って露頭掘りがある場合、これが断続的にある場合でも連続的にある場合でも、一つの露頭掘りとして取り扱う。但し、鉱脈が谷を横切って存在し、その谷筋の両側とも露頭掘りが行われている場合については、谷筋を挟んで別々の露頭掘りとして取り扱う。

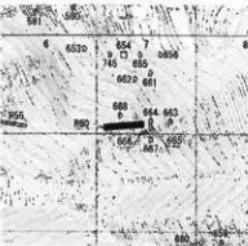
5) 番号の付与

確認した間歩、露頭掘りについては番号を付与する。番号については、これまでの調査の続き番号を付与する。(間歩については数字のみ、露頭掘りについてはRの後に数字、それ以外については、補の後に数字とする)

分布調査は2月1日に終了し、その成果については、最終的に詳細報告としてまとめられ、島根県教育委員会に提出されている。

内部調査は9月、12月、1月に実施した。また内部の計測は9月20日と12月19日の2回実施され、報告書が提出されている。

石見銀山遺跡 露頭掘調査票

露頭掘番号:	880	調査者:	
調査年月日:		測量:	
露頭掘の大きさ:		測量:	
伏 傾:		測量:	
方 向:		測量:	
地 質:	石英閃長岩	測量:	
成 定 年 代:	江戸時代以前	測量:	
式古開闢の方法:	削し	測量:	
古文書等の記載:	斜面より上方に凹凸が存在する。	測量:	
信 證:		測量:	
目 次:		測量:	
付 繊:		測量:	

石見銀山遺跡 露頭掘調査票



露頭掘番号: 880

調査方法:

HDSJ1(掘削)



調査:

HDSJ1(掘削)

下部より露頭:



調査:

HDSJ1(掘削)

上部より露頭:

石見銀山遺跡 露頭掘調査票



露頭掘番号: 880

正側

HDSJ1(掘削)



左側

HDSJ1(掘削)



右側

HDSJ1(掘削)

第2図 間歩調査 調査票例

第3章 これまでの間歩調査の概要

石見銀山における中世から近代にいたる採掘跡の体系的な調査は、平成9年度・10年度の二か年に亘って実施されたのが初めてである。この調査においては、銀山柵内を中心に約192haの範囲で分布調査が実施され、露頭掘り跡、間歩を含め577箇所もの採掘跡を確認、仙ノ山を中心に広範囲に採掘がおこなわれたことが確かめられた。また分布状況のみならず、これら採掘跡については入口（断面）にいくつかの形態が見られること、それらが時代を追って変遷すると考えられること、など新たな知見を多くもたらすものであった。⁽¹⁾

以降追加的な調査が数次行われ、最終的に露頭掘り跡、間歩を合せて634もの採掘跡が存在することが確認された。これらは言わば、第1期の間歩調査ともいうべきものである。

平成18年度には間歩の現状及び安全査の現況

確認のための調査が実施された。当時は石見銀山遺跡が世界遺産登録への佳境に入っていた時期で、遺跡への来訪者が増加しており、また遺跡の公開範囲の拡大が検討されていたことから、坑道内への立ち入りを安全上の観点から制限することが求められていたためである。現況確認の結果、危険度の特に高い間歩については進入防止策を設置した。

今次の調査は、平成9年度からの調査時に鉱業権の問題等により調査が実施できなかった範囲の分布調査と、前回調査を実施した範囲の再踏査、現況確認を目的としたもので、平成23年度から開始され現在に至っている。

これまでの調査の結果については、以下に示すとおりである。

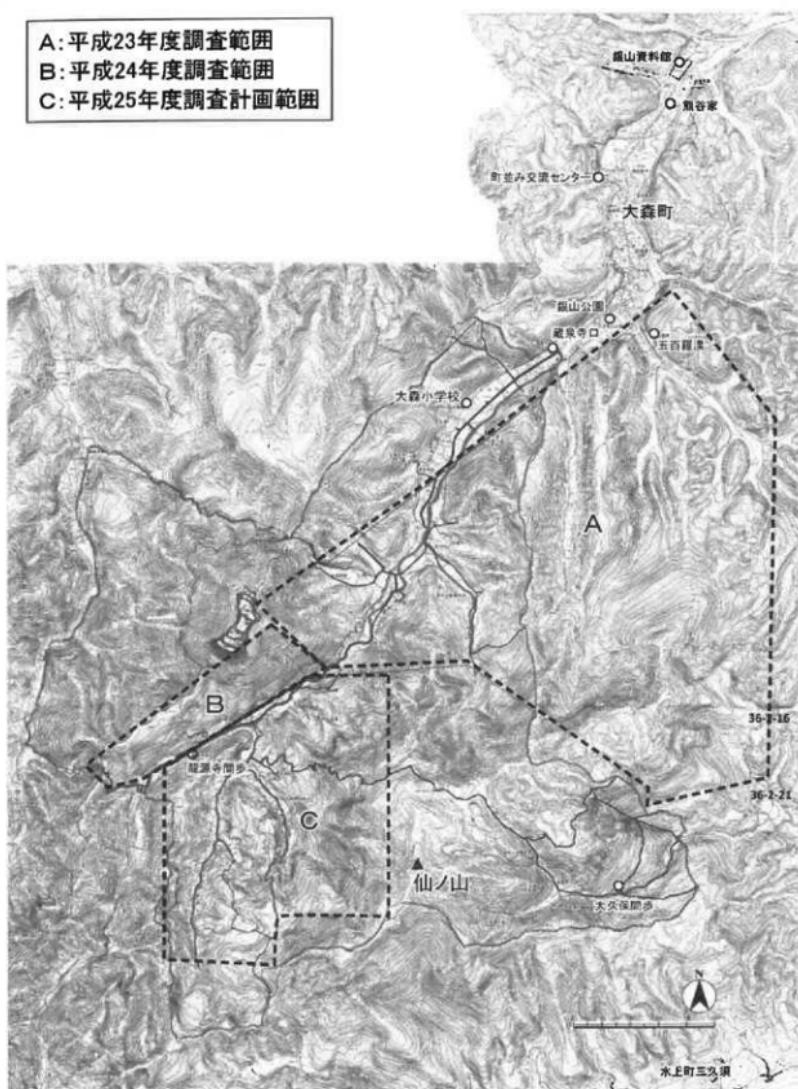
（註）（1）『石見銀山遺跡統合調査報告書 第3冊』島

根県教育委員会 大田市教育委員会 1999

第1表 過去の間歩調査一覧

調査年度	調査区分	調査場所	図面番号	対象面積	確認した採掘跡		合計	備考
					露頭掘り	間歩		
平成9 (1997)	分布調査	足布山谷、石銀、仙ノ山本谷、柏子谷		108	32	302	334	
平成10 (1998)	分布調査	大谷、柄畠谷、仙ノ山清水谷、石銀		84	16	227	243	
平成11 (1999)	分布調査	平成9・10年度調査場所周辺		36	1	30	31	
平成12 (2000)	内部調査	大久保間歩、新横相間歩 岐之丞坑、金生坑						関連調査の調査を実施
平成13 (2001)	分布調査	史跡指定範囲のうち調査が 行われていなかった範囲		12	2	24	26	
平成14 (2002)	内部調査	甘南備坑、金生坑						
計				240	51	583	634	
平成18 (2006)	現況確認調査	平成9～13年度にかけて実施した範囲						
平成23 (2011)	分布調査	仙ノ山北東側		180	1	14	15	
平成24 (2012)	分布調査	要害山西側		14	0	21	21	
計				194	1	35	36	
合計				434	52	618	670	

- A: 平成23年度調査範囲
 B: 平成24年度調査範囲
 C: 平成25年度調査計画範囲



第3図 平成23年度～25年度の調査範囲

第4章 平成25年度間歩調査の概要

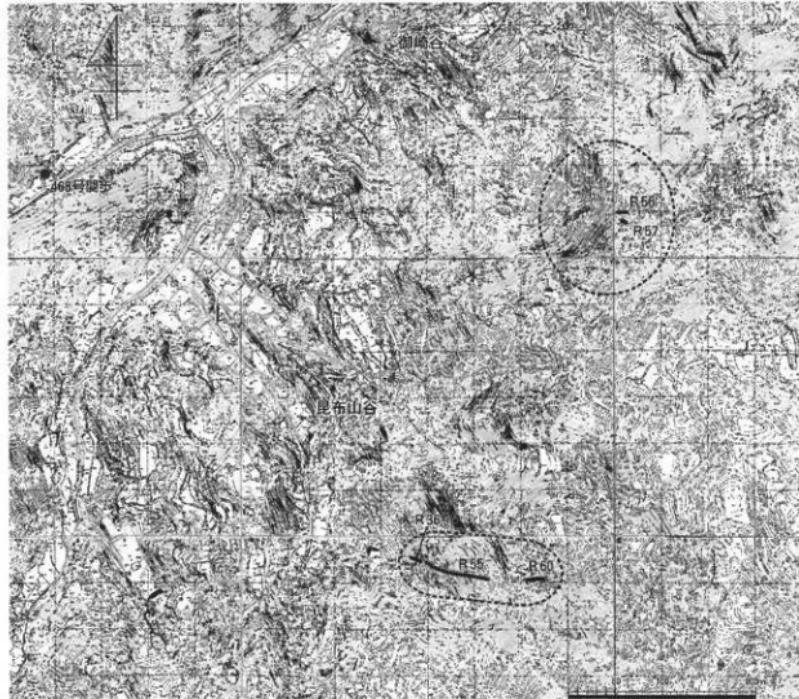
平成25年度の間歩調査では、仙ノ山西側の柄畠谷・昆布山谷を中心とした範囲の分布調査と現地確認調査、468号間歩（甘南備坑）の内部調査を実施した。

第1節 分布調査

今回調査を行った昆布山谷・出土谷地区、柄畠谷地区、御崎谷地区（休谷から大谷にかけての地区）は、東の仙ノ山、北の要寄山に挟まれた場所にある。江戸時代の柵の範囲では西側にあたる。

前回までの調査では150か所程度の採掘跡が把握されていたが、今回新たに133か所の採掘跡を確認した。内訳は露頭掘り跡7か所、間歩126か所である。これらは昆布山谷奥の東側斜面と御崎谷地区の南側斜面との、大きく2つのエリアに集中して分布している。

昆布山谷奥の東側斜面ではR54・R55・R60等の露頭掘り跡が確認された。これらは前回までの調査において確認されていたR36の上方に存在するものである。



第4図 平成25年度分布調査確認間歩（主なもの）及び468号間歩位置図

R 54

R 54は標高325m付近から330m付近にかけて存在する。幅1.5m、深さ3.0m、延長15.0mを測るもので、方向はN 53° Wに探掘されている。この上端付近では、前回の調査時に376号間歩が確認されている。

R 55

R 55はR 54の上方、標高330m付近から375m付近にかけて存在する。前回調査時には草木が茂り状況がよくわからなかったが、今回の調査で確認に至ったものである。方向はS 80° EとR 54とはやや向きを異にしている。

幅1.5m、深さ2m、延長53mを測り、大規模に探掘されている。

R 60

R 60は標高390m付近に存在する。規模は幅3.0m、深さ1.8m、延長21mを測り、N 85° E方向に掘削されている。

この露頭掘り跡上方では、鉱脈に沿って掘り進められたと考えられる間歩（664号間歩、665号間歩等）や鉱脈に対して直交する間歩（666号間歩）も確認されている。

これら3つの露頭掘り跡周辺では、鉱脈を追って探掘したと考えられる間歩が複数確認されている。これらは露頭掘りと合わせ、同一の鉱脈を探掘したものと考えられる。

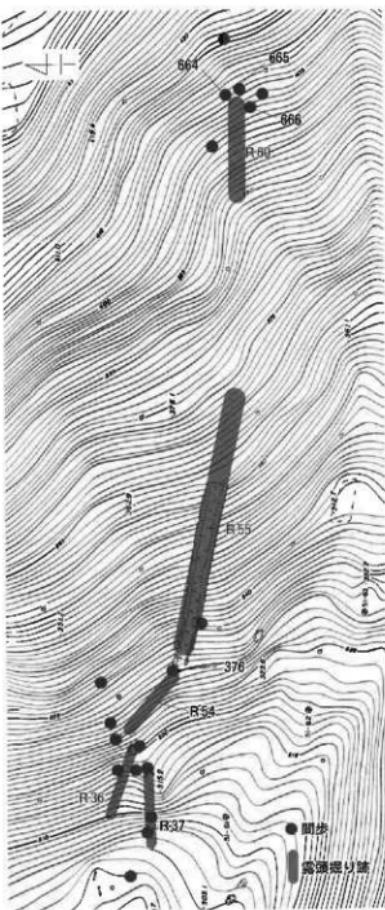
一方、御崎谷南側斜面、極楽寺跡・順勝寺跡から南東方向に約200mのところでもまとまって露頭掘り跡（R 56、R 57）や間歩（704～740号間歩等）が確認された。

R 57

R 57は標高392m付近に位置している。規模は、幅1.4m、奥行き1.2m、長さ5.0mを測るが、この延長上に窪地が認められることから、規模は少しきくなる可能性もある。

周辺では鉱脈を追って探掘したと考えられる間歩が30基近く確認された。坑口の形状はそのほとんどが不定型なものであった。

また斜面下方ではズリが堆積している状況が確認できたほか、周辺では岩盤を削り貫いて作られた鼻縫岩が散見された。



第5図 昆布山谷地区露頭掘り跡(R 54～60)位置関係図

第2節 内部調査

内部調査は468号間歩において実施した。468は要害山南側の大谷地区、公開坑道の龍源寺間歩から東へ約100mのところにあり、「甘南備坑」という名称が与えられている。

この間歩については平成14年度に一度内部調査が実施されているが、今回改めて入坑し内部の様子を確認した。概要是次のとおりである。⁽¹⁾

坑口

要害山への登山道脇にあり南西(N17°E)に開口している。坑口は高さ約1.5m、幅約1.0mの規模で、形状は矩形を呈する。その前面には土砂の堆積が見られ、一部水が溜まっていた。

坑道

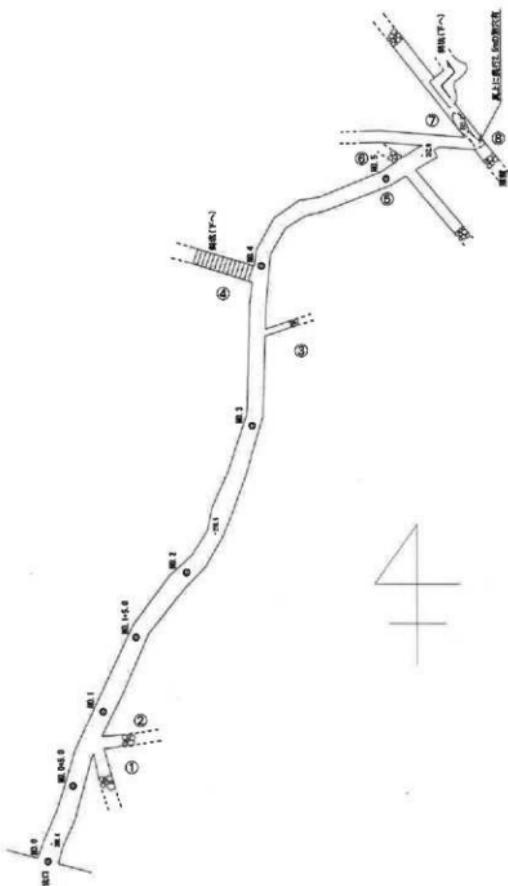
坑道は主坑道とそれから派生する坑道(下部坑道への階段(通路)や採掘跡など)からなるものである。

主坑道は延長が約55mを測る。坑口の標高は床面で計測して約208.6m、そこから奥に向かって約6%の上り勾配となり、50m付近では約212.5mとなる。約40m付近から大きく東側に向きを変え、そこから約15mで最奥部に至る。

主坑道から派生する坑道(支坑道)は、坑口から奥側に向かって約8mで右手側に2方向、約34mで右手側に1方向、約40m付近で左手側に1方向、約51mで山側に確認できる。さらにその先には別の坑道と考えられるものがあり、その坑道を右側に向かうと人が立てるほどの空間が存在する。ズリの堆積もあり主要

な採掘場の一つと考えられる。

別の坑道と思われるものとの合流地点では、この地点までの掘削と異なり、左側半分が奥へと掘り進められ、天井部分も一部が掘り残されたような状態のままであった。派生する坑道のうち約51m付近のものは、ズリ等で埋め戻されていた。



第6図 468号間歩平面図 (S=1/300)

坑道壁面ではタガネによると考えられる掘削痕が明瞭に確認された。また天井面と壁面の境付近では、刺突状の窪みが約20cm～30cm間隔で穿たれていた。さらにそこから約10cm下では15cm×12cmの長方形から梢円形を呈した掘り込みが50cm～70cmの間隔で認められた。

壁面は、基本的に滑らかな面となっており、削岩機等を用いて掘削した跡は確認されなかった。

なお、支坑道の計測値については表に示すとおりである。

第2表 468号間歩支坑道計測値 (単位:m)

支坑道番号	坑口からの距離	高さ	幅	奥行き
①・②	8	1.59		
③	34.5	1.3	0.4	1.6
⑤	49.1	2.0	1.1	
⑥	51	0.9	0.9	

松江工業高等専門学校の計測による

(1) 今回の概報における坑道内部の数値は基本的に平成14年度調査時のものに限り、一部今回の入坑に際して実測したものを使用している。なお、支坑道の計測値については、今年度の委託の中で得られた数値を掲載した。

第5章 ま と め

分布調査で確認した露頭掘り跡・間歩について
分布調査では、前章までで報告したとおり露頭掘り跡や間歩など133か所の及ぶ採掘跡を確認することができた。

このうち尼布山谷地区において確認した露頭掘り跡（R36・R54・R55・R60）は、同一の鉱脈の露頭部を採掘した一連の露頭掘り跡と判断できるもので、延長150m以上にも及ぶ規模を持つ。これは石見銀山では最大級ともいえる規模であり、仙ノ山西麓で大規模に採掘が行われていたことを改めて認識させるものとなつた。

それらの採掘時期は現時点では明らかでないものの、石見銀山における鉱脈の露頭部の採掘が江戸時代以前の比較的早い時期に行われたとされる⁽¹⁾ことを踏まえると、石見銀山開発初期の採掘に伴うものである可能性が高い。

尼布山谷・桟畠谷のある仙ノ山西麓周辺は、15世紀代の勅請とされる鉱山に関する神を祭る佐尾亮山神社⁽²⁾の存在や文献史料などから、古くから開発が進められ16世紀半ばには相当開発が行われていたと考えられている場所であるが、それを直接的に示す考古学的資料等がまだ不足している現状にあって⁽³⁾、採掘面でそれを示す遺構が確認されたことは大きな成果であった。

ところで、今回これらの露頭掘り跡は基本的に永久鉱床とされる範囲にある⁽⁴⁾。永久鉱床にはいくつかの鉱脈（佐藤鉱、兼鉱、馬之背鉱など）の存在が知られているが、現時点では今回の露頭との対応関係についてははっきりとできていない。また、これらの露頭からどのような品位の鉱石が採掘されたのかについても明らかでない。

こうした課題については、今後さらに調査を進めていきたい。

御崎谷南斜面（極楽寺南東）において確認した露頭掘り跡、間歩については別の問題が提起されることとなった。石見銀山においては福石鉱床と永久鉱床の二つの鉱床が知られているが、今回確認されたものはその中間的位置に存在する。この付近での鉱床・鉱脈の存在については既に指摘されていた⁽⁵⁾が、今回の発見でこれまでの想定よりやや西側=永久鉱床側に伸びる可能性が出てきた。現時点ではこの鉱床は福石鉱床の一部と捉えているが、今後さらに検討が必要であろう。

468号間歩について

468号間歩（甘南備坑）の調査では、この坑道が大きな変更を受けることなく良好な状態で保っていることが確認された。採掘の時期については、鉱脈に対して垂直方向に開闢されたいわゆる横相であることや、断面形態も整った矩形を呈すること、近代の削岩機等による掘削が見られないことから、江戸時代に採掘されたものと考えられる。

しかし、この468号間歩が実際いつから採掘が開始され、どのくらいの期間操業されたのか、またどのぐらいの量の銀が産出されたのか、というような点はこれから課題である。文献上では、「元禄四年万覚書」に「甘南備山」という間歩の記載が見られることから、そのように呼ばれる間歩があったことは確かである。それによれば、「甘南備山」は元禄四（1691）年の段階で、規模が行地200尋、敷下45長、16年前の延宝3（1675）年と元禄四に大盛で、延

宝3年には判銀四貫一四〇匁の運上銀の上納のある、重要な間歩であったことがわかる⁽⁴⁾。

残念ながら、史料上の「甘南備山」=現在の「甘南備坑」とすることには、情報も限られており慎重にならなければならないが、仮に同一のものであった場合、少なくとも17世紀前半には採掘が行われ、またかなりの量の銀がこの間歩から産出されたことになる。

操業の時期、産出量などを明らかにしていくことは容易ではないが、今後さらに検討を加えていきたい。

（註）

（1）『石見銀山遺跡総合調査報告書 第3回』島根県教育委員会、大田市教育委員会、温泉津町教育委員会、仁摩町教育委員会1999

（2）由緒では承暦6（1434）年に同じ石見国の美濃郡にあった佐置光山神社が勅請されたとされている。

（3）『石見銀山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』大田市教育委員会、島根県教育委員会2005ほか

16世紀半ばの造構はこれまでの調査で確認されているが、あまり多くはない。

（4）『石見銀山遺跡総合調査報告書 第3回』島根県教育委員会、大田市教育委員会ほか 1999。なお、鉢床について論じたものはほかにもある。

（5）前掲1

（6）『石見銀山歴史文献調査報告書X 元禄四年万覚書・元禄六年石雲隱覚集』島根県教育委員会 2014

写 真 図 版



図版2



665号間歩



昆布山谷の現況



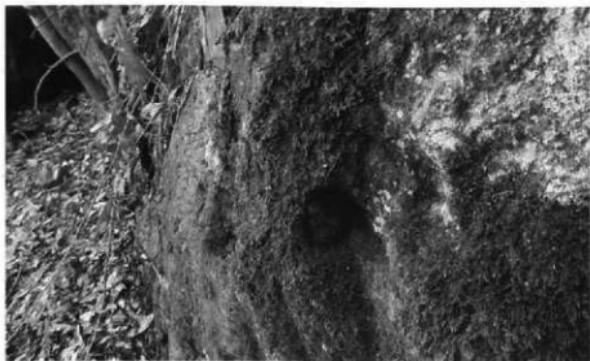
佐鹿壳山神社



露頭掘り跡 (R57)



716号間歩



鼻縁岩

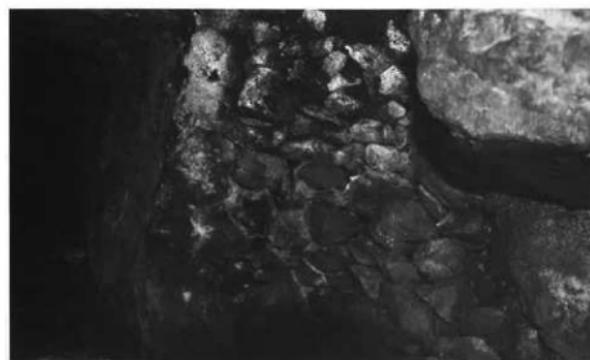
図版4



468号間歩（甘南備坑）
周辺状況



468号間歩（甘南備坑）
内部状況



468号間歩（甘南備坑）
埋戻し状況

報告書抄録

ふりがな	いわみざんざんいせきまぶちょうさがいほう		
書名	石見銀山遺跡間歩調査概報		
副書名	平成25年度間歩調査		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編執筆者	田原淳史		
編集機関	島根県教育委員会、大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 〒694-0064 島根県大田市大出町大田口1111番地		
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	平成26（2014）年3月		
調査原因	石見銀山遺跡間歩調査		
所収遺跡名	種別	主な時代	特記事項
石見銀山	鉱山遺跡	戦国時代 江戸時代 明治時代	

石見銀山遺跡

平成25年度間歩調査概報

平成26（2014）年3月

編 集 島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発 行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

URL [http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/
iwami_ginzan/](http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/)

印 刷 有限会社 松陽印刷所
